釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和７年（2025年）12月22日発行　VOL 38

子どもに「委ねる」学習活動

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

先週の月曜日（15日）は前日からの暴風雪等の影響で市内の全学校が臨時休校になりました。あれからもう１週間が経過しました。12月は「師走」と言われるように、毎日が慌ただしく過ぎていくように感じています。そのような状況の中で、学校として目指すゴールを全員が意識して教育活動に臨んでいるか、学校課題に対して適切な策が講じられ改善に向かっているかなど、学校経営の柱になる部分を見極めながら学校づくりを進めていかなければなりません。校長職に就いて４年目が終わりに近付いていますが、自信をもって「できています」と答えられないところに力不足を実感します。２学期も残すところあと５日となりました。現在、教職員はもとより、生徒、保護者の皆さんにも学校評価に取り組んでもらっています。今週中にその結果が集約されることから、冬季休業期間中に確実に分析して、１年間のまとめとなる３学期に何をすべきなのか、また、次年度に向けて何を重視すべきなのかを明らかにしていきたいと思います。まずは今日からの５日間、生徒たちが無事に学校生活を送り、冬季休業に入れるように全教職員で力を合わせて学校づくりに向かいたいと思います。

さて、本校においては、毎年、11月から12月にかけて、「教育課程編成会議」が行われます。管理職はもとより、本校の主任、部長を担っている教員でチームを編制し、次年度の教育課程（学校の教育活動の全体計画）について協議します。今回は定期テストや学力テスト（文教テスト）のことが話題になりましたが、現段階では大きな変化はなく、次年度も今年度並みの教育課程を編成できそうです。

しかし、次年度の教育課程を実施するに当たって、私たちの教育課程に対する意識、教育活動への認識は、これまで以上に変えていかなければならないと考えています。現行の学習指導要領で「主体的な学び」が掲げられ、中央教育審議会では「子どもを主語にした学校」とも言われ、全国各地で学びを子どもに「委ねる」教育活動が見られ始めています。次期学習指導要領においても重要な考え方であることには変わりなく、子どもに「委ねる」教育活動は加速していくことが予想されます。この「委ねる」ことについて、私たち大人の認識を改めて確認しておく必要があると思います。

現在、多くの学校で「単元内自由進度学習」という学習方法が取り入れられています。特定の単元において、子どもたちが教師主導ではなく、自分のペースや学習計画に沿って主体的に学ぶ学習方法です。導入とまとめ以外は、子ども自身が学習内容や時間配分を決め、苦手分野に時間をかけたり、発展課題に挑戦したりします。保護者の皆さんはどう思うでしょうか。「教師が教えなくてよいのですか」、「分からないままにならないのですか」、「評価はどうするのですか」などの不安の声が聞こえてくると思います。

単に子どもたちに「委ねたらいいよね」ということではありません。教師として大切なのは、子どもたち一人一人の学びを見取っていくことです。足りない知識や視点があれば、全体や個別に伝えていきます。必要に応じて資料を用意したり、グルーピングを工夫したりもします。「委ねる」とは教師の願いを放棄することではありません。全てを教師が背負う必要はなく、子どもたち同士の関わりの中で学びを支えていくという捉え方です。子どもに「委ねる」ことの真意をいつも見つめることが求められます。